

氏名	ツォン ウェンティン
ヨミガナ	ツォン ウェンティン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第547号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 「恋果物語」—台湾の色と模様による彩磁の器 〈作品〉 恋果物語 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三上 亮
（副査）	東京国立近代美術 工芸課長 館		（）	唐澤 昌宏
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文では来日して感動した日本文化の精髓の一つである風物詩から発想し、「恋果物語」—台湾の色と模様による彩磁の器の制作についてまとめた。「多くの民族により形成された台湾の文化における装飾紋様と色」を研究し、台湾文化の現状に即した、器の意匠¹を模索したいと思っている。即ち、装飾紋様と色を研究することで、時代と地域に合った器を研究するということである。

また、塩化物による液体顔料—「彩磁」の研究を基に、さまざまな磁土に試験を行ったので、今後の参考資料として整理した。それを元に、創作と融合して、液体顔料の特長を活かし、新しく応用できるように、より自由な創作をすることを目指す。

論文の構成は以下の通りである。

序論では、研究動機について述べる。五年前に来日し、私にとっては異文化である日本文化に強い影響を受けたことにより、自分が育った地元台湾の歴史と文化に対する疑問が深まった。その一方、言葉を知らずに来日し、さらに気候や環境の違いで、慣れるまでは長い間非常に不安で、悩んでいたが、忘れられない充実した三年間を思い出すと、言葉の慣れない環境の中で最も關心しているのが生活の中の色と模様であった。

第一章で、私自身の視点や思想から「模様」を通じて自分なりの台湾文化を探究した。台湾の歴史や文化的な背景を始めとし、昔からの台湾の民族紋様や、戦後の台湾の布柄—台湾花布を創作の発想源として位置付ける。また、提出作品の発想原点として、台湾の果物の匂や特徴を探究し、台湾人との替えない

¹ 美術・工芸・工業製品などで、その形・色・模様・配置などについて加える装飾上の工夫。デザイン。参考：大辞林。

ものを伝える。それらは季節にかかわる感情や文化が台湾人の心にも強く訴えかけてくるものがある。さらに、第二章で、塩化物による液体顔料である「彩磁」を研究し、日本や海外における液体顔料について、作家作品や文献を記録した。さまざまな原料と磁土に試験を行い、液代顔料の特長を模索する。意匠の創作と彩磁が融合することで、液体顔料の良さを活かし、新しい応用ができるように、そしてより自由な創作が実現することを目指したい。

それを元に、第三章では、現在の研究に繋がる、2011年国立台南芸術大学大学院修士論文「盛装」から今までを振り返って検証する。特に、現在の研究への大きなきっかけとなった金沢卯辰山工芸工房での作品制作と研究のそれぞれについて詳しく述べる。東京芸術大学での3年間の制作をベースとして、「恋果物語」という作品提出した。

第四章で、この論文の結論として、自分なりの台湾の「模様」と「色」を生み出すことで、その模索の過程と制作の結果を通じて、自分自身のアイデンティティと文化の疑問を解決していきたいと考えている。

(論文審査結果の要旨)

鍾雯婷氏は、台湾生まれの女性作家であり、東日本大震災後、まもなく来日し、金沢と東京で学んだ。論文は四章からなり、一章は博士提出作品のイメージ・ソース、二章は彩磁技法、三章は博士提出までの作品、四章は提出作品について論じられる。第一章では台湾の四季を示すものとしてのフルーツや、鮮やかな花布など博士提出作品の根底をなすイメージ・ソースが論じられる。つづく第二章の多くの努力と時間が強いられる彩磁について述べられているが、同技法をめざす後進にとっても有用な部分となろう。第三・第四章では、氏がきわめて繊細に日本文化をかみ砕き、自国の文化に対して思いを深くはせつつ、作品を作り上げてきたプロセスがよく書き込まれている。

全体としては日本文化に接することで確立されてきた台湾人としての、また作家としてのアイデンティティについて自分の言葉でつむいでおり、好感のもてる内容となっている。いっぽうで作品に集中することに時間を注ぎ込んだこともあり、今少し思考の整理、書き込みが必要な部分も残されている。しかしアジア系の留学生にとって日本での異文化体験は、共通性の発見が多いためか、自国の表現を抜け出せないケースも見られるなかで、自分の表現に執着することなく異文化体験を取り入れ、新たな作品に昇華していくという過程を示しているという点で、博士学位授与に相当するものと判断したい。

(作品審査結果の要旨)

鍾雯婷の博士終了提出作品「恋果物語」は、作者が陶芸に出会い研究、制作してきた様々な技法を駆使してたくさんの磁器製のオブジェを使い成立させたインスタレーション的作品である。

「恋果物語」とは、作者の出身地台湾の布地、台湾花布にその発想の源泉があり、台湾の生活風土に根ざす風物、南洋の豊かな果物をモチーフとして、日本で習得した陶磁器に関する技術を駆使して本作を台湾文化に即した意匠としたいという、自身のアイデンティティにも関わるテーマである。初めは器づくりに発した動機が美術的な自由度や空間意識の目覚めなどから磁器が集合体として空中に浮遊している作品となった。

鍾雯婷は台湾の国立台南芸術大学で学んだ後、金沢の卯辰山工芸工房にて三年間、日本の磁器の制作技法を習得するために、来日している。台南芸術大学時代の服飾からの発想による「盛装」という磁器の作品は、本来なら布地で行われる裁断を、磁器の土の上に置き換えて制作し、磁器という硬質な素材に女性の皮膚のような柔らかさや、きめ細かさを表現した。初来日した金沢では台湾との自然環境や文化風土の大きな違いを実感し、日本独特の陶芸文化、主に生活との関わりの深さに触発され、「使うこと」によって成立する用の器がテーマとなっている。その後、さらなる研鑽を積むため、本学で当時の陶芸科教授、島田文雄（東京芸術大学名誉教授）のもとで新たに彩磁（液体顔料）による色彩の研究を進めるなか、ノ

ルウエーの陶磁作家Arne Ase氏との出会いもあり彩磁の研究にさらにのめりこんでいった経緯がある。

本作は、磁土の泥漿鑄込の技術により成形された球体を、柔らかなうちに裁断し自由な形態を作り、表面には台湾の果物の模様がニスレジスト技法により浮き彫りのように表される。さらに彩磁により色を施し無釉で焼きしめる。地面にじかに置かれた大きな壺から発するように吊り下げられたおよそ百にもおよぶオブジェは光を通し、それらは軽やかに空間を演出することに成功した。器に発した制作が近代芸術のものの見方を取り入れ台座の不要、用とは別の作品造りにまで至りその作品世界は大きく変化した。これは、工芸の範疇で制作してきた作者が、技法としての表現を作品として昇華させうるのかというひとつの挑戦であり、大いに評価に値する秀作と判断する。

(総合審査結果の要旨)

台湾出身の筆者は、留学生として3年間金沢で学んだ後、本学の博士課程に入学した。入学当初より造形表現の優れた器の作品制作をしており、研究成果の期待できる人物であった。

四章からなる論文は、第一章に台湾の歴史的背景と民族の紋様、筆者が台湾紋様と称する鮮やかな花布と提出作品のモチーフである台湾の果物について論じられている。第二章では、提出作品のテーマでもある彩磁について、研究成果のデータと共に詳細な技法が述べられており、同様の技法を研究する陶芸制作者には貴重な資料となるであろう。第三章では、今回の作品制作につながる台湾での取り組み、金沢、東京での作品の変化について述べている。第四章では、提出作品のコンセプトについて来日以来受けた、日本文化の影響と自身の制作姿勢を交えた論考を踏まえ、制作工程を丁寧に書き込み、課程博士としての体裁を整えた論文である。

提出作品は論文題目と同じ「恋果物語」であるが、これまで取り組んできた、机上の作品と異なり、宙に吊り下げたインスタレーション的作品として表現されている。これは、筆者自身が来日以来あためて来た構想の具現化である事が、論文から理解出来る。母体となる床置きの大球体の器を受け身として、その上に様々な記憶や形を込め成形され、果物をモチーフにした大小百点近くの小オブジェが宙を舞う作品である。成形には、白色度の高い透光磁器土を用い、鑄込み成形した球体を生乾きのうちに裁断し再構成する独自の新しい成形法によって形作られている。さらに素焼き前にラックレジスト技法によるレリーフ状の紋様を表し、彩磁による彩色を施して軽やかな色調の作品に仕上げている。作品の成形技法や加飾に用いた彩磁の研究等、独自性の高い研究制作は博士学位授与に相当するものと評価したい。